



この子たちの家を設計したのはそう、ぼくである。  
もう何年前になるだろうか？

コンクリート造の建物の3階部分を、海外勤務から帰国したのを機に大掛かりにリフォームした。コンクリートの躯体を残してすべてを刷新する、スケルトンリフォームというやつである。

最初はぼくのモダンな設計に、彼らの両親はとても喜んでくれた。だがその上の世代には理解されず、わけもなく彼らのじいさんに反対された。自分たちが思い描けないことはあり得ないということだろう。まったく理不尽であったが往々にしてあることだと、後々知ることになる。

でもそんなことにはめげずに、一歩ずつ設計を進めた。自分の頭の中ですでにイメージができあがっている、トーゴのある空間を実現するために・・・

多くの困難を乗り越えてその家は完成した。それはぼくのデビュー作だった。まだまだ納得のいかない部分もあるが、最初の作品としてはそれなりの空間ができたとは思っている。



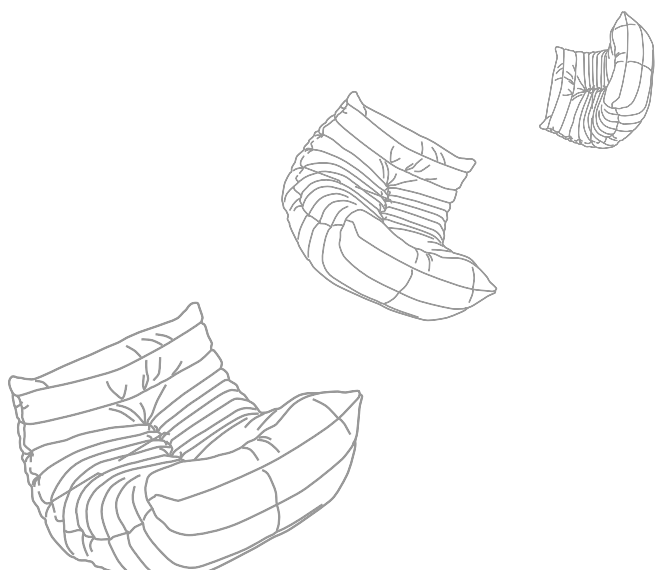
さあ、空間は完成した！あとは家具だ！  
来る日も来る日も彼らの両親とぼくは家具の店を回っていた。それは夏の暑い時期だった。

新宿・表参道・原宿そして目黒通りを目黒から環状8号線まで端から見ていった。最後の方はもうくらくらしてきた。東京近辺の家具屋はほとんど行ってしまって、もう行くところはないのではないかとさえ思った。

## そしてぼくはトーゴを提案した。

おそらく1回は眼に入っていて候補にはなっているとは思っていたのだが、少し不安であった。しかし彼らの両親はあっさりOKしてくれた。その時OKしてくれた理由はさだかではないが、ぼくが提案した薄水色も中々他にない色で、それを気に入ってくれたのかもしれない。

でもそれより現在の彼らの動きを見れば、もっと理由がわかったような気がする。そう、とにかくトーゴは軽くて簡単に動かせるのだ。



よし！ソファは決まった！後はこれを軸にしてダイニングテーブルやダイニングチェアを選んでいく番である。最初これはもうすんなりいくと思ったが、実はここから結構難航した。トーゴのデザインに合わせるということは非常に難しいので、まったく別の形状やデザインで考えることとした。ただ色としてはあの薄水色を引き立たせるような色を持ち込むように考えた。

## そしてすべてが揃った！



ほっとした気持ちで彼らの両親と完成している家に帰ってみると、残って遊んでいるはずの彼らの姿が見えないではないか。

少しあせりながら新しくできた家の中を捜してみると、なんと彼らはキッチンの吊戸棚でかくれんぼをしていた。それは1メートル50センチの所に付いていて高さ50センチしかないところである。もちろん奥行きも35センチ位しかない。

「なんでそんなところに君たちは入れるんだよ・・・」

ぼくが玄関扉として使われているポリカーボネート板を開けて、リビングに入っていくと彼らは気づいたようである。「こんにちは」ととりあえず中学生の兄の方が言っていた。でも次の瞬間二人はまた戦闘モードに入り、彼らの姿はリビングから続いているデッキに消えていった。こちらの顔を認識しているかどうかはさだかではない。



「すみません」彼らの母親は申し訳なさそうに言った。  
「いつもこうなんですよね」  
うん、それは知っている。昔からそれは同じである。  
この短い間にそんなに子供の性格は変わるものでもない。

そんなことを考えていたが、目の前にはあられもない姿で、くの字で逆さになっているトーゴの姿があった。助けを求めて何とも苦しそうである。当然ながらぼくはトーゴを助けて、とりあえず元の形に戻してやることにした。

ぼくは機械の点検をするようにトーゴの体を調べていった。やはり結構日焼けしていた。それはトーゴのたぶたぶの肉のひだ！いや違ったキレのたるみ？の部分を持ち上げると元の色がわかるのだった。でも次の瞬間気を失いそうになった。そのトーゴのきれの間に・・・

## 「チョコスティックを隠すな！こんなところに！」

彼らの母親にチョコスティックを渡して呆然としていると、彼らがデッキの方から疾風のように戻ってきた。彼らにソファの使い方を教えてやろうかと考えていると、彼らは次の行動に移った。もうケンカはすんで仲直りしたようだ。

今度は一人用のトーゴに二人で仲良く座り、ゲームをしながらじゃれ始めた。子猫が絡み合ってじゃれているのとまったく同じようである。男の兄弟にしては、この年になっても仲が良くて気持ち悪いぐらいだ。でもそのうちまたケンカになるのは、ぼくにはわかっている・・・





実は今日は設計した家の定期検査ということで、家の不具合や様子を見にきたわけだが、ぼくの頭の中ではこの家の完成時の空間と、家具が搬入された状態の静止画で固定されていた。しかしその画像は、はかなくもぶち壊されていった。モダンでミニマムで詩的な、ぼくの世界はどこへいったのだ？

いや、でもそれで良いのかもしれない。家や家具は人が使ってこそいきるのだ！そこに彼らの笑顔があればそれでいい！トーゴよ、苦しいかもしれないがもう少し我慢してくれ！もう少したてば大人になるよ、彼らも。きっと・・・

**「でも、トーゴを投げるなお前たち！」**